

ファッションデザイナー 中里唯馬氏

PROFILE 1985年東京生まれ。17歳で単身渡欧。ベルギーのアントワープ王立アカデミーに学ぶ。2008年と2009年、欧州最大の学生コンテスト『インターナショナル・タレント・サポート(ITS)』に出場し2年連続でYKK賞を受賞。2009年に自らのブランド『YUIMA NAKAZATO』を設立する。2011年にはアメリカの雑誌『V MAGAZINE』の特集で、世界の新人クリエイターに選出され、2016年7月、パリ・クチュール(高級注文服)コレクションにて作品が高い評価を獲得。現在、ブラック・アイ・ピース、レディ・ガガ、EXILEなど国内外の錚々たるアーティストの衣装を手掛ける一方で、映画『ルパン三世』(実写版)や、宮本亜門の舞台『SUPERLOSERZ(スーパーローゼーズ)』の衣装デザインを担当するなど、幅広い分野で独創的な作品を発表し続けている。



「創造力」と「先進テクノロジー」の融合で、 クチュールのマス・カスタマイゼーションを実現したい。

アートが普通に暮らしの中にあり、 一般家庭と違う特殊な哲学があった

編 中里さんは30歳という若さで、2016・17年秋冬の『パリ・クチュール・コレクション』の招待デザイナーに選ばれ、煌びやかで独創的な作品を発表し、ヨーロッパのみならず世界のファッション業界に鮮烈な衝撃を与えました。この由緒あるコレクションに日本人が公式参加したのは「12年前の森英恵さん以来」なんだそうですね。12年前と言えば、奇しくも、中里さんが18歳でファッションデザイナーへの一歩を踏み出した年。そのとき以来の招待デザイナーだということですから、パリコレと中里さんとの不思議な縁を感じてしまいます。そもそもファッションとの縁が生まれたのは、いつ頃のことなんですか?服飾デザインに興味を持つ、何か大きなきっかけがあったのでしょうか。

中里 きっかけと言うより、生まれ育った家庭環境の中で自然に、ファッションを含めたアート全体に興味を抱くようになっていったのだと思います。父は彫刻家で、木材や金属を素材に、かなり大きなオブジェ作品を制作していました。何でも自分で作るのが得意で、日常的に使う家具はもちろん、食器などの陶器類も自ら焼いていたんです。家具どころか、いま住んでいる家も、コツコツと一人で建てたものですから(笑)。母は彫金作家で、やはり、つねに創作に打ち込んでいた。両親共

に「生活は作品の一部であり、自分たちで創り上げていくもの」と考えていたようです。個人の美的センスを大切に、「美しいもの、自分たちが納得できるものに囲まれて暮らしたい」という欲求が、二人ともかなり強かったのではないのでしょうか。そんな家庭環境の中で育ったものですから、私自身、そういう「美の追求」的な考えが当たり前のだと思っていました。

編 ということは中里さんも、子供の頃から、身の回りのものをご自分でつくっていたわけですか。

中里 はい。自分が身に付けるもの、欲しいと思ったものは、できるだけ自分で。

編 普段着の洋服なども?

中里 一から縫い上げるわけではありませんが、高校に入った頃ぐらいから、既製服をそのまま着て学校へ行くようなことはあまりしなくなりましたね。

編 高校は、制服ではないんですか。

中里 制服なしの高校だったので、皆が思い思いの自由な服装で登校するわけです。私の場合は、気に入った一点物の古着を買ってきてミシンをかけて縫い直したりしながら再構築し、自分なりのファッションを主張していました。

編 親子で存分に創造性を追求する。デザイナーの道へ踏み出していくには、理想的な環境だったわけですね。

中里 確かに状況としては恵まれていましたが、しかし一方で、

自分の暮らしている環境と、周りの、外部の世界との間に、何か大きな隔たりのようなものも感じていました。

編 アーティスト一家と一般家庭との違和感みたいなものですか？

中里 アートが暮らしの中に普通にある状態。そこにはつねに、一般の家庭とは違う特殊な哲学のようなものがありました。家の中での話題も価値観も、外の世界とは明らかに違う。そんな「内と外の差異、矛盾」みたいなものが、自分の中で葛藤となって暴れ出しそうになるときがあるんです。いま思い返せば、そうした複雑な気持ちをうまく緩衝してくれたのがファッションだったような気がします。内なる自分の世界と外の社会をしっかりと繋ぎ止めてくれるツールと言いますか。それで、早い時期からファッションに目覚め、奥深くにのめり込んでいったのだと思います。

ここで勉強したい、ここしかない 『アントワープ王立アカデミー』に留学

編 中里さんは18歳のときに、本格的にファッションの勉強をするため単身でベルギーに渡り『アントワープ王立アカデミー』に入学したそうですが、なぜこの学校を選ばれたのですか？

中里 私が高校3年のとき『アントワープ王立アカデミー』を卒業する日本人留学生のことが国内で話題になっていたんですが、その卒業生の作品をニュースの写真で見ると衝撃を覚えました。いままでに自分が見たことも考えたこともないファッションがそこにあったのです。それは服飾デザインに対する自分の概念を根底から覆すものでした。どのような背景からあのような作品が生まれてくるのか知りたい。そう思ったら居ても立ってもいられず、気づいたらアントワープへ見学に行っていた(笑)。

編 あこがれのアカデミーは、期待通りでしたか。

中里 実際に自分の目で確かめてみてさらに驚きました。デザインやファッションのレベルの高さは言うに及ばず、世界中から優秀な学生たちが集まり、その卒業生たちをスカウトする業界の関係者やファッション関係者がたくさん来ていて、本当にわくわくする世界なんです。『ここでファッションの勉強をしたい!自分にはここしかないんだ』という強い願望が沸き上がってきました。

編 それでいったん日本に戻り、受験のための猛勉強をするわけですね。

中里 それまでは、ファッション好きとは言ってもバスケットボールに熱中していた体育会系の高校生でしたから、英語だっけとともに話せません。必死になって語学や美術関連の勉強を直しました。担任の先生からは、『ものには順序がある。アントワープへ行くのは、まず語学を勉強し美大へ進学してからでも遅くない』とアドバイスされましたが、『僕にはここしかないんです』と。なかば強引にベルギー行きを決めてしまいました。

編 そしてみごと合格も決めたと。担任の先生も仰天したのではないですか(笑)。『アントワープ王立アカデミー』はヨーロッパで最も歴史のある芸術アカデミーの一つで(1663年設立)、とくにファッション科は入学が難しく、うまく入学できても、毎年100名程度の中で卒業できるのは10名ほどなのだそうですね。

中里 確かに、想像以上に厳しい世界でしたね。世界各国の個性的な学生が集まり、日々、切磋琢磨していました。同級生には日本人も何人かいましたが、私が最年少でした。アントワープで徹底的に叩き込まれたのは、多くのライバルの中でいかに自分の立ち位置を築き、勝ち残っていくか、どのようにして自分のオリジナリティーを磨き、自己表現の可能性を広げていくかということ。本当に貴重な4年間だったと思います。



表現すべきものは、すでに自分の中にあった。 自らのブランド『YUIMA NAKAZATO』誕生

編 中里さんはこの厳しいアカデミーで早くから頭角を現わし、卒業制作でも賞を受賞されていますね。『アントワープ王立アカデミー』出身で世界的に活躍している6人のデザイナーのことを『アントワープの6人』と呼んだりするそうですが、そのうちの一人であるアン・ドウムルメステールさんが中里さんを高く評価していたと聞いています。

中里 実はそうした過分な評価をいただいていたこともあって、卒業後、自分の進路を決めかねていたときアン・ドウムルメステールさんを訪ねて行ったんです。ぜひあなたのアトリエで働かせてくださいと。ところが、『作品にはオリジナリティを追求しているのに、自分の人生は、人と同じでいいのですか』と問いただされてしまいました。

編 尊敬する人の傍で学び、やがて独立していこうと思うのはごく普通感覚だと思いますが、「あなたは、才能があるのにそんな普通の道を歩みたいのか」と。愛のある厳しい言葉ですね。

中里 返す言葉を失うと同時に、眼から鱗が落ちた気がしました。表現すべきものは、既に自分の中にある。誰かを頼って遠回りする必要はない。そう気がつき、日本に戻って自分のブランドを立ち上げることにしました。

編 『YUIMA NAKAZATO』の誕生ですね。

中里 自分のブランドと言っても、アトリエは自宅の一室。昼間は制作、夜はアルバイトをしていたんです。そうしてコツコツと資金を貯め、ある程度貯まったら仲間たちとパリで展示会を開催しました。しかし反応はいまひとつで、手応えがありません。バイトを長期間休んでやって来ているのに(笑)。パリでの辛



Winner of VERTICE AWARD
INTERNATIONAL TALENT SUPPORT #7 (July, 2008)



COCCODRILLO AWARD & INSTALLATION
June, 2009



LUPIN THE THIRD COSTUME EXHIBITION
September 2014

い時期はしばらく続きました。資金も乏しく、生活も苦しい。それでも、自分にしかできないことがあるはずだと信じ、自分のアイデンティティーに根ざした新たな発想、新たな素材の活用などを探究し続けました。

編 探究の中で、何かつかんだものはあったのでしょうか？

中里 『和』の融合ですね。日本の伝統に基づいた『和』の美しさを、洋服でうまく表現できないかなと考え、具体的に作品にも採り入れていったんです。

編 そのあたりから、流れが大きく変わっていったわけですね。

中里 ある日、アトリエにしていた自宅に国際電話がかかってきました。はじめ母親が電話に出たのですが、英語で何か言っているけどよく聞き取れないと。私が代わって受け答えしてみたら、相手はどうやらファーギーのスタイリストらしく、どこかで私の作品を見て電話してきたらしい。用件を確認すると「ファーギーが世界ツアーで使う衣装のデザインを依頼したい」と。最初は、手の込んだはずだと思いましたよ（笑）。しかし、どうやらそうでもなさそうなので、具体的な意向を聞かせてもらいました。そして最後に恐る恐るバジェットを尋ねると、『ノーリミット、ハイクオリティ。予算に上限はないから最高のものを提案してほしい』と言うのです。当時の私にとっては夢のような話でした。

編 制約がない中で「最高の提案を」というのは、プレッシャーも相当なものだったのではないですか？

中里 そうなんです。2週間まったく休みなしにひたすら作品づくりだけに没頭し、複数のデザイン案を提出しました。世界ツアーで使われるのはその中の一つだけ。採用に至らなかったらどうしようと非常に緊張しましたが、最後にファーギー自身が一点を選出し、その案をととても気に入ってくれたというので、本当にほっとしました。



SUPERLOSERZ SAVE THE EARTH
宮本亜門演出舞台

これまで諦めていた色彩表現を 最新インクジェット技術が叶えてくれた

編 その「夢のような依頼」に応えた実力が評価され、中里さんの作品と名前が一気に世界中に広がっていったわけですね。その後、他のミュージシャンなどからも次々と衣装の注文が舞い込んできたのではありませんか。

中里 現在は、年間に約500体ぐらいの衣装を手掛けています。

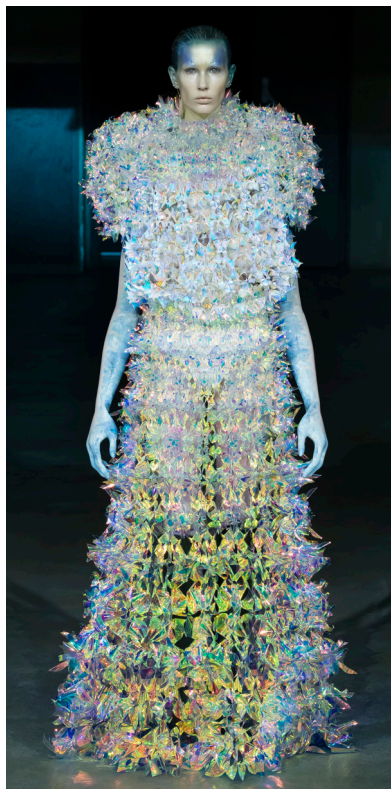
編 365日に500体ですか?それは凄い!今回『パリ・クチュール・コレクション』のデザイナーとして公式に招待されたのも、そうした世界的な活躍が背景にあってのことなんですね。ところで先ほど、ご自身のアイデンティティーを、日本の伝統文化である『和』の世界に求めたとおっしゃいましたが、今回の『パリ・クチュール・コレクション』の作品を拝見すると、透明な折り紙でつくった鶴が無数に重なり合い、きらきらと小さな命の光を発しているような、多面的な美の世界を感じました。見た目はドレスでも、折り鶴という日本独自の和の文化が融合されているのではないかと。

中里 今回の衣装のデザインは、以前訪れたアイスランドの風景やオーロラがモチーフとなっています。滞在中に撮影した写真をもとに画像を起こし、特殊なホログラムのドレス生地インクジェットプリンターで印刷しました。一枚の生地の大さはA5サイズ程度で、それをプロッターでカットし折り紙のように折って、一つの有機体(ユニット)をつくります。これが折り

鶴のように見えたのでしょう。この有機体(ユニット)を組み合わせ、モデルの体形にフィットさせながらドレスに仕上げていきます。布はもちろん、針も糸も、いっさい使いません。

編 フィルム生地への印刷には、富士フィルムの高延伸性UVインク『Uvijet KV』が使われていますが、どのような効果を実感されましたか。

中里 私はこれまで、2種類のホログラム生地に、白・黒のバック生地を組み合わせて色彩を表現してきました。この場合、使える色は4種類に限られてしまいます。再現できる色をもっと増やせないかと思っていたところ、今回、富士フィルムさんからご提案をいただき、透明な素材にインクジェットでグラフィックをプリントしてみたのですが、仕上がりを一目見てびっくりしてしまいました。とても発色がよく鮮やかなんです。しかも、有機体(ユニット)を折り込んでいく際にインクが剥がれ



ることもない。非常に高い定着性、堅牢性を持っている。衣服には摩擦がつきものですから、プリントの堅牢性というのは、品質と共に最も重要な特性の一つなんですね。インクジェットが、これほど高いレベルでクオリティと強度を両立できるとは思いませんでした。今回、フィルム生地への印刷に関しては、企画の段階から完成にいたるまで全面的に富士フィルムさんにご協力いただき、本当に感謝しています。

編 インクジェット技術は、美しさや強さに加えて、小ロット多品種ニーズに対するカスタマイズのしやすさという点でも大いに注目されています。

中里 クチュールのような一点物を制作するのは「ファッションの原点だ」と、私は常々思っています。ミュージシャンや俳優だけでなく一般の人に、個々の体形や好みに合った高級な注文服を低価格で手軽に提供できるようになれば、もっともっとファッションの楽しみ方が広がっていくと思うんですね。だからこそ私は、クチュールのマス・カスタマイゼーションを具現化したいのです。もちろん、それは口で言うほど簡単なことではありません。クリアしなければならない課題はたくさんある。しかし、豊かな創造力と先進のテクノロジーを活かすことにより、近い将来、必ず実現できると信じています。

編 印刷業界という枠を超えて、私たちFFGSも、富士フィルムならではの創造力と先進テクノロジーを駆使しながら、印刷業界という枠を超え、ファッション業界の革新にも貢献していきたいと思います。本日は大変お忙しいところ、貴重なお話をありがとうございました。

